1/21
東福

「いずも」空母に改修

周辺国の緊張高める

柳沢協二さんの
ウオッチ安保法制

元内閣官房副長官補

政府が、ヘリコプター搭載護衛艦「いずも」を、戦闘機が発着できる小型空母に改修することを検討しているという。

敵の潜水艦を警戒するためのヘリ空母であれば、専守防衛上の理屈はまだ成り立つが、政府が艦載機として検討するF35Bは、対地攻撃能力があり、敵地に侵入するための飛行機だ。それを搭載して相手国の沿岸まで運ぶことができる空母を保有すれば、専守防衛を掲げる日本が、攻撃能力を持つことになる。

空母は、大国の力の象徴でもある。大国が武力によって国家間の問題を解決する姿勢の象徴だ。日本はこれまで、そうした外交姿勢は取らない立場を貫いてきた。空母を保有すれば、日本も武力を外交手段に使う国になるかどうかが、問われてくる。

問題は、日本が攻撃能力を持つことを、周辺国がどう受け止めるかだ。相手国が脅威だと受け止め、緊張が高まれば、日本が生きていくための環境を、かえって悪くする可能性がある。

政府は、改修後の「いずも」艦上で米軍機を運用することも検討しているという。自国が攻撃されていなくても、同盟国を武力で守る集団的自衛権の行使や、戦闘中の米軍に対する支援に使われる可能性があるということだ。これは米軍と同じ戦場にいることが前提であり、日米一体化というよりも、米空母部隊の指揮下に編入されるに等しい。

安全保障政策には、費用対効果を考えた冷静な判断が必要だが、今は「武器には武器」という発想が独り歩きしている。今こそ政治の理性と計算に支えられた判断が必要だ。

（聞き手・新開浩）